

奈良フィルハーモニー管弦楽団は「奈良にプロのオーケストラを」との思いで結成しました。苦しいときもありましたが、「好き」だからこそ続けてこられました。

チャレンジ精神が大事だと思っていますので、生きている限りはチャレンジし続けたいです。

特定非営利活動法人

奈良フィルハーモニー管弦楽団 団長

おお はら すえ こ
大 原 末 子 氏



2019年12月3日、当研究所・応接室にてインタビュー

▶奈良県初のプロオーケストラを目指して

——奈良フィルハーモニー管弦楽団（以下、奈良フィル）結成の経緯をお聞かせいただけますか。

当楽団はオーボエ奏者だった私の主人、全良雄ぜんよし お（本名：松山良雄）が「奈良にプロのオーケストラを作りたい」との思いから、1985年に音楽大学を卒業した同級生に声を掛けて結成しました。

当初は20名ほどの小規模編成で、県内の学校を訪問し演奏していました。子供たちはよほど親がクラシック音楽に興味を持っていないと、オーケストラの演奏を聴きにコンサートに行く機会もありません。団員は皆、「子供たちに生の演奏を聞いてもらいたい」という熱い思いを持っていました。

結成当時はバブル景気に沸いていましたので、学校以外にホテルのパーティーでの弦楽四重奏などの依頼も多く、土日は予定がぎっしり詰まって

奏者が悲鳴を上げる程の忙しさでした。そのような期間が5、6年続き、いろいろ経験させて頂いたことで、楽団の活動を軌道に乗せることができました。結成したタイミングがちょうどよかったのだと思います。

——現在は50名以上の規模で活動されていますね。

奈良県文化会館主催でオーケストラの演奏会をしたいとの要望を受けまして、楽団の規模を大きくしなければならなくなったので、当初は方々に声を掛けて人数をかき集めて、60名程度に規模を拡大しました。今では団員の弟子も加わるようになり、徐々に若い世代も増えています。

——年齢構成はどのようにになっていますか。

若手とベテランが半々で、30歳代から50歳代までバランスよく在籍しており、弦楽器には20歳代の奏者もいます。若手だけではなく年配の経

豊富な奏者もいることで全体が締まりますし、演奏中に弦が切れるといったハプニングがあっても、落ち着いて対応できます。

バイオリンの弦が切れた場合は、後方の演奏者のバイオリンと順番に交換していき、一番後ろの奏者が弦の切れたバイオリンを受け取って、舞台袖に退いて弦を張り替えます。若手奏者はそういう経験がほとんどありませんので、ベテラン奏者がいるといろいろ学びながら経験を積むことができるのです。

—定期演奏会はいつから始められたのですか。

第1回が1997年です。主人が「プロのオーケストラとして活動するのであれば、定期演奏会を開催してもっと認めてもらわなければ」と考えて始めました。

最初のころは、主にモーツァルトやベートーヴェンの曲を演奏していました。一見単純な曲のように思うかもしれません、モーツァルトやベートーヴェンの曲は音が少ない分、僅かな音のズレも目立ちますので、実は結構難しく、演奏が下手だと



第46回定期演奏会（2020年3月開催）

楽団の演奏レベルがすぐに分かってしまいます。

—演奏会へはどのように集客されたのですか。

実は定期演奏会の開催に先立って、「奈良フィル友の会」を立ち上げました。大和郡山、高取、斑鳩の3カ所で小規模のコンサートを開催して、約700名の会員を集めた後に第1回定期演奏会を開催したのです。

こうした草の根活動的なイベントは、今もサロンコンサートとして毎月、郡山城ホールで開催しています。予算の都合上、弦楽四重奏などの小規模の演奏になりますが、ホールとの共催ですから告知活動はホール側でしていただけるので助かっています。

少しずつでも応援してくださる方を増やしていくればと継続していますが、サロンコンサートにお越しいただいた方が、必ずしも定期演奏会に足を運んでいただけるとは限りません。

サロンコンサートの来場者は、演奏者の息づかいや指づかい、演奏者のトークを楽しみにされている方が多く、オーケストラのような大規模な演奏には興味を示されない方も結構いらっしゃるからです。そのため、サロンコンサートに出演する団員には各奏者個人のファンを獲得するようにと伝えており、お越しいただいたお客様には「定期演奏会にも出演するので、ぜひ聴きに来てください」とお声掛けしています。団員もファンを獲得しようと思えば、自ずと練習にも熱が入りますので、サロンコンサートは勉強の場にもなっています。

クラシック音楽のファン層は60~80歳代の方が中心ですが、体調を崩されるなどして徐々に減っていく傾向にあり、友の会会員数は約550名に減っています。もっと若い世代や子育てで音楽から遠ざかっていた女性を呼び戻したいと考えています。

—「ムジークフェストなら」にも参加されていますね。

「ムジークフェストなら」は2012年に始まりましたが、奈良フィルは1年目には参加しませんでした。すると「なぜ奈良フィルが出ていないの

か」と奈良フィル友の会の会員の皆様から奈良県文化振興課に問い合わせが相次いだそうです。文化振興課の担当者から「2年目から、ぜひお願ひします」と依頼を頂き、参加することになりました。

その際、担当者からは「県民と一緒にできる企画を」との要望を頂きました。奈良県には合唱が好きな方が多いですし、参加者から県内外の友人、知人にも参加や来場を呼び掛けていただけるのではないかと考え、ベートーヴェンの「第九」を演奏することにしました。開催時期が6月でしたので、「夏の第九」と私たちは呼んでいます。

2020年は違う曲を演奏して欲しいとの要望を頂きましたので、華やかなオペラの合唱を演奏する予定です。『県民だより』1月号で合唱団への参加募集を告知しており、たくさんの合唱経験者の方が参加してくださいます。

▶初代団長の遺志を引き継ぐ

—— 楽団の活動が軌道に乗る中、団長を交代されましたが、経緯をお伺いできますか。

2014年に主人が胃がんであることが判明したのです。自覚症状がまったくなく、見つかった時にはステージ4でした。ちょうどその年の4月に、日本を代表する著名な先生を客演指揮に招いた定期演奏会を控えていましたので、手術をしたのは演奏会の3日後でした。1カ月半の入院を経て自宅療養となりましたが、翌年11月1日に楽団結成30周年の記念公演を控えていたこともあり、主人はその後も仕事を続けていました。誰よりも楽しみにしていた記念公演でしたが、その前々日に容体が悪化し、演奏会の3日後に亡くなりました。

葬儀は主人の意向で家族葬にしましたが、団員が「お別れ会」をしたいと提案してくれまして、翌年4月に郡山城ホールで開催しました。お別れ会には大和郡山市長や教育長もお招きして、主人が好きだった曲や思い出の曲をオーケストラで演奏し、大勢のお客さまにもご来場いただきました。

そこで私が団長を引き継ぐことを皆様にお伝え

しましたが、ソプラノ歌手をしており、奈良フィルハーモニー混声合唱団の指導もしていましたので、そのうえオーケストラの運営までできるのだろうかと不安はありました。とはいっても既に1年先まで楽団の仕事が決まっていましたので、ここでやめるわけにもいかないと思い、引き受けました。

——ご主人から助言などはあったのでしょうか。

「取りあえず残っている仕事だけはして欲しい」と言われました。2013年から日本オーケストラ連盟に加入していますが、大変であればそちらのほうはやめていいと。ただし、NPO法人としての運営はそのまま続けて「小編成に戻ってもいいから学校の巡回公演だけは続けてほしい」とのことでした。

最後には「もう苦労させたくないから、本当に大変だったらやめてもいいよ」と言ってくれましたが、そんなに簡単にやめられるはずもなく、丸4年、なんとか乗り切ってきました。

——右腕としてサポートしてくださる方はおられるのですか。

はい、楽団には楽譜の管理や編集などをするライブラリアンが必要で、生前は主人がしていましたが、今は団員ライブラリアンとして4人が手分けしてやってくれています。他にもコンサートでのステージのセッティングについて、ホール側と打ち合わせをする舞台マネージャーがいます。そのようにサポートしてくれる人材を少しずつ増やしていきたいですね。

私はソプラノ歌手でオーケストラは専門外ですから、楽団を引き継ぐ際に、団員に「助けて欲しい」とはっきり伝えました。そうしないと、後々大変なことになるのは目に見えていましたから。

そうしたこともあるって、例えば演奏会の曲目の打ち合わせで必要となる、交響曲などの楽器編成が詳しく調べられるサイトを教えてくれるなど、団員は皆協力的でいつも助けてくれます。

予算には限りがありますので、知恵を絞ってい

ただいっています。「素晴らしい演奏をしたい」という思いは皆一緒ですので、「足りてできるのは当たり前。足りないものを工夫で補って、良いものを作ろう」と団員には話しています。

— 楽団を結成して35年目になりますが、続けてこられた原動力は何でしょうか。

何にでも通じることですが、「好き」に勝るものはないと思います。苦しいときもありましたが、好きだからこそ続けることができました。団員も収入は多くないですが、演奏することが好きなので続けられるのだと思います。奈良フィルは特にそのような雰囲気があるかもしれません。最近は客演指揮者をお呼びする時でも、団員が自分たちの演奏したい曲を自発的に提案してくるようになりました。

— 若手の育成についてはどのようにお考えですか。

学園前ホールで「ワンコインコンサート」という500円で楽しめる室内楽のコンサートをホール主催でさせていただいております。開催回数は少ないですが、今後の成長が期待できる優秀な若手奏者を出演させています。小さな編成の場合、ピアノも必要ですから、奈良フィルの若手奏者だけでなくピアノの若手奏者にも出でもらっています。サロンコンサートもそうですが、お客様の前で演奏する機会を与えて勉強してもらうとともに、自分のファンを作るようになると伝えています。



— 演奏会には毎回、客演指揮者を招かれるのですか。

はい、今後の成長が期待される若手指揮者をお呼びすることもありますし、全国的に有名な先生にお越しいただくこともあります。

客演指揮者をお招きするときは、練習期間の昼食用におにぎりやお弁当を作つてお渡ししています。元々は、練習の合間に食べていただけたらと、特大のおにぎりを作つて持つて行ったことが始まりでした。「こんなことしてくれる楽団ないわ」と大変喜んでくださる指揮者もおられ、「奈良フィルに行くと、奥様の手料理が食べられる」とFacebookで発信された先生もいらっしゃいました。それを読んだ他の指揮者から「これが、かの有名なおにぎりか」と喜ばれたこともあります。

— 心温まるお話ですね。

若手指揮者は経験未熟なところもあり、団員との間に溝ができる楽団もあるようですが、奈良フィルの団員は皆、温かく和氣あいあいとしています。客演指揮者からも「奈良フィルさんは温かいから、ご一緒できてよかったです」と仰っていただきます。

お招きした指揮者にはその後有名になられた方もおられ、「奈良フィルは若手指揮者の登竜門だから行っておけよ」と他の指揮者に言ってくださる方もおられます。

若手指揮者がこの世界で成功するには多くのことを学ばなければなりません。奈良フィルでは演奏会のプロデュースや選曲も指揮者に依頼することで自身の勉強の場にしてもらい、ここを踏み台にして世界に羽ばたいてもらえたと想っています。そして、「成功したら奈良フィルに帰つて来てね」とお願いしています(笑)。

— 楽団の温かい雰囲気は、どのようにして生まれたのでしょうか。

主人の人柄だと思います。「私の全さん」と言われるほど温和な人で、厳しいところもありましたが、怒ったり責めたりせず、人を諭すようなところがあり団員からも慕われていました。結成当

初からアットホームな雰囲気でしたので、後から加入した団員にもそうした雰囲気が自然に伝わっていくのだと思います。

私達のような小さな楽団は、団員一人ひとりが向き合い、協力し合うことが活動を続けていくうえでとても重要になります。

——奈良フィルの今後についてはいかがですか。

現在、自宅の一室を事務所にしていますが、チケットの手配などの事務的な仕事もありますし、外部の方も呼びやすくなっていますので、駅に近い便利な場所などに事務所を移転したいと考えています。そして、団員に安定した給与をお支払いできるように、「奈良といえば奈良フィル」と認めてもらえるような楽団を目指していきたいです。まだまだこれから挑戦ですが、できることを一生懸命やっていこうと思います。「怖いもの知らず」と言われても構いません。それこそチャレンジ精神です。この歳になると恐れるよりも「やりたい」という気持ちが勝ちます。

►イタリアに渡り、発声法を学ぶ

——ご自身が音楽の道を進むことになったきっかけをお伺いできますか。

音楽との出会いは子供の頃、幼稚園の先生にオルガンを習い始めた頃でしょうか。当時はまだ家庭にピアノが普及していない時代でした。その後どうしても本格的にピアノを習いたいと思うようになりました、父に頼んでピアノを買ってもらいました。

歌も好きで、小学校6年生のときにはオーディションを受けて、有名な演歌歌手の地方公演に子役として何度か出させていただきました。お芝居を交えながら独唱する場面もあり、大きな舞台で自分の声が会場に響き渡るのを聴き、子供ながらに陶酔していました。その経験が忘れられず、声楽の道を進むことにしました。

大阪芸術大学在籍時には、両親に頼み込んでイタリアの有名なテノール歌手の講習やミラノヴェルディ音楽院の講習にも参加しました。期間が長

く、費用も随分かかりましたが、父がイタリア行きを許してくれました。

私はソプラノでも「レッジエーロ」と呼ばれる、空気のように軽やかな声の歌手に属します。イタリアでは毎日朝から晩まで、ひたすら発声練習に励みました。その甲斐あって、追求していた発声法を習得することができ、大学の先生からも「とても進歩したね」と大変喜んでいただきました。今の私があるのも、イタリアに行かせてくれた父のおかげです。



——得意とされている曲は何ですか。

ベッリーニのオペラが声にあっていて、だいたい得意ですが、中でも「夢遊病の女」という曲が得意です。他にはプッチーニのオペラ「ジャンニ・スキッキ」のアリア「私のお父さん」やドニゼッティの「ランメルモールのルチア」も十八番です。5月にはロッシーニの「セビリアの理髪師」から「今の歌声は」も歌います。

実は来年（2020年）還暦を迎えるが、記念に10月3日、郡山城ホールでリサイタルを予定しています。節目の年ですし楽団もありますので、前半はピアノ伴奏で日本歌曲を、後半はオーケストラ伴奏で私の歌いたい、そして好きなオペラをたくさん歌いたいと思っています。その名も「わがままリサイタル」。

声は衰えていくものなので、いつまでオペラが歌

えるか分かりませんが、歌える限りは歌っていきたいです。チャレンジ精神が大事だと思っていますので、生きている限りはチャレンジし続けたいですね。

—お話をうかがっていると、こちらも元気をいただける気がします。

ありがとうございます。初めて手相を見てもらった時に「あなたは太陽です」と言われました。誰に対しても慈愛を持って分け隔てなく接するタイプだそうです。この歳になってそう言われると、嬉しいですね。主人が亡くなる前に、私が明るい人で本当によかったと言ってくれたのが、とても嬉しかったです。

—モットーは「正直に生きる」とのことですが。

先ほども言いましたように、私は歌に関しては専門ですがオーケストラは専門外ですので、下手に知ったかぶりをすると後で痛い目にあいます。だから、団員には正直に「私が知らないことは教えて」とお願いしています。

人間、知ったかぶりをしたくなるときもありますが、嘘をついても結局ばれますし、意地悪をしたり悪口を言ったりすると、最後は自分に跳ね返ってくるのではないかと思う。無様でもいいので、正直に生きることが大事だと思います。

—ストレスはあまり感じられないのでしょうか。

そう思っていましたが、気づかないうちにストレスを溜めていたようです。主人が亡くなった翌年の8月から突然声が出なくなりました。忙しかったので自覚していませんでしたが、オーケストラに関する専門知識がないのに運営をしなければならなくなつたことがストレスになっていたようです。

その時生まれて初めて、自分がソリストとして出演するコンサートを降板しました。まったく声が出なかつたので、ホワイトボードで筆談する日々が半年以上続きました。カイロプラクティックに行くと、ストレスが溜まって体内から電磁波が出ていると言われ、結局、歌えるようになるまでに丸1年かかりました。

さすがにこの時ばかりは「この一線を越えたら

鬱になる」と感じるほど落ち込みました。三途の川ではないですが、「ここから向こうへ行ってはいけない」と感じました。

—そこで踏み留まることができたのはなぜでしょうか。

団員が待っていると思ったからです。「奈良フィルの団長が鬱になってしまったら、楽団の仕事がなくなり皆が困ってしまう。このままここで負けではない」と。

ある団員に「末子さん、それは全さん（ご主人）が『休養しろ』と言ってくれたんや。他のどの部分が悪くなつても、末子さんは気がつかないだらうから、一番大事な声を出ないようにしたんや」と言われました。その言葉に本当に救われました。「ありがとう」とボードに書き終わらないうちに、皆が「気にしなくていいから」と言ってくれて、涙が止りませんでした。ですから私は団員が大好きです。本当にファミリーのような素晴らしいオーケストラだと思います。

►失敗を恐れず常にチャレンジ

—奈良のよさについてお伺いできますか。

私は大阪出身ですが、奈良は静かで落ち着いたよい所だと思います。京都は煌びやかですが、奈良にはわびさびの雰囲気があります。意外と外国人にもそういう雰囲気を好まれる方が多いようで、人気のないお寺を散策されているのを見かけることもあります。

毎年「ムジークフェストなら」が県内の様々な



会場で開催されていますが、どうしても奈良公園周辺の会場ばかりが注目されてしまうように思います。少し不便かもしれません、会場となる町や村を一定期間ごとに移動させながら、その期間はそこで集中的に様々な演奏をするようにすれば、その町を訪れる人がもっと増えて、特産品なども注目されるようになるのではないかでしょうか。

—若者に対するメッセージをお願いします。

若い方はクラシックを嫌いする人が多いように思います。小学校では音楽の授業を専門外の先生が教えることもあり、CDを再生して聴かせるだけの授業もあるようですが、それでは音楽の素晴らしさは伝わりません。是非、オーケストラの生の演奏を聴き、様々な楽器のアンサンブルを直接体験すれば、きっと感動することだと思います。

また、失敗を恐れずに常にチャレンジすることも大事だと思います。何度も失敗しても構いません。壁にぶつかっても、また別の道が開かれていることもあります。いつも成功するとは限りませんし、挫折も経験するでしょうけど、怖がっていたら何もできません。私の還暦リサイタルもそうです。正直怖いですが（笑）。是非お越しいただき、生のオーケストラ演奏も聴いていただけたらと思います。

—クラシックファンを増やさないといけませんね。

そうです。奈良はピアノのある家庭が多いと言われますが、ピアノの練習はされてもオーケストラのクラシック音楽にはなかなか結びついていません。オーケストラ音楽があるからこそ、ピアノやオペラ、バレエなど様々な分野の音楽に分かれていくのであって、やはり元締めはクラシックではないかと思います。あれだけの音が集まってアンサンブルができているということは素晴らしいことではないでしょうか。心を通わせないとアンサンブルはできませんし、それは普段の私たちの生活にも通じることかと思います。

私は幼稚園でも歌の指導をしていますが、年長組の園児には二重唱を歌るように教えています。

まだ幼い子供達ですが、時々きれいなハーモニーを響かせられた時には「きれいに声を合わせられると気持ちいいでしょう。その気持ちを覚えておくのよ」と伝えています。それが一緒に演奏することの喜びであり、皆が協力しないとできないことだと教えるのです。幼い頃にそういう経験をすることは、とても大事なことだと思います。

●プロフィール 大原末子氏

■主な経歴

1960年、大阪市生まれ。1982年、大阪芸術大学演奏学科卒業。同年、イタリアヴェルディ音楽院に夏季短期留学し、ディプロマを習得。1985年、奈良フィルハーモニー管弦楽団ソプラノ歌手デビュー。2000年4月、奈良フィルハーモニー混声合唱団設立。2013年4月、大和郡山カトリック幼稚園音楽講師として勤務。2015年2月、奈良フィルハーモニー管弦楽団団長に就任。同年4月、DMGMORIやまと郡山城ホールアドバイザーに就任。2019年12月、大和郡市教育委員に就任。現在3つのコーラス団体を指導。

■座右の銘、好きな言葉

愛、チャレンジ

■大事にしていること

家族の絆、団員たちの絆

■趣味

旅行、美味しいものを食べること

■私のモットー

いくつになってもチャレンジし続ける
正直に生きる

■好きな食べ物

フィレステーキ、苺

■私のストレス発散法

一人旅行

■好きな場所

石上神社の参道

■所属組織の概要

・名 称：特定非営利活動法人 奈良フィルハーモニー管弦楽団

1985年、初代団長（故）全良雄氏が設立。2012年、NPO法人を取得。2013年、オーケストラ連盟に籍を置き、内外ともにプロオーケストラとして認められる。現在、奈良を拠点に近畿一円で活動中。

（前田 徹）